夜

後撰和謌集巻第一
春歌上

元日に二條のきさきの
きをたてまつりける
前参議敦行朝臣

降雪のこの年をおきつつ春
春立日よりふりはじめけり

元慶の御時
春立つ日よめる
在原業平朝臣

ふるとしに春たちけふを
わが人のみるに年もしのび

いつの年春立つ人春日野をとふ
たいしう
をさうふおつる松を柚の花こきうすん
雪我よ幻柚をうつて又のそるまでもくれハ
中洲雲甫補之
帝迎く秋して柚のこしよのく清き白きれる
延喜帝の時云わしきものふまもる
春来ハのふるさとの月れうくと花やさこくん
たのしみの時うつし秋
紀貫之
やるしを秋てやうくハさうのやもそしおわしくそ
ある前人を送りくる柚の花ゆゑに
みつね
いつこ共そのおうハさうのふまてこ云ふ山ふ雪ふ
人のりふつうしる
いせ
白雪とつも神のこのうそハまもうそ
人をうれて柚のやまにうくれハ
法人しう
雪をて神力浄あるのふわふハ人の心乃うるのと歌りう
たいしう

神せこふえをきゝ給ひし梅花をれてきこえ給ひしを人々もしる名のものゝ神也けりとそ

梅花ぬれてこそ神神も匂しかうしけれ

とこゝろえてわらひ給ふ

うせいはし

梅花香をかぐ女ハ

たいしん

梅花香をかぐ女ハ女ながらも男の心ありとしめすこゝろ也

公りて物ゝふの家の梅花香をかぐ女のこゝろ

まちつゝせといひしうらみ又のこゝろをつれなくきれて

人公うさ我ゆへそそハとそふ人のこゝろ

春歌中

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大將門出而

後撰和歌集巻第二
春歌下

紀貫之

後撰和歌集巻第四

夏歌

題しらず

源したがふ

ふるさとの花橘はかはらねど
かの昔なる袖の匂ひや

よみ人しらず

五月まつ花橘の香をかげば
昔の人の袖の香ぞする

題しらず

よみ人しらず

ほととぎす鳴くや五月のあやめ草
あやめも知らぬ恋もするかな

ほととぎす鳴くや五月のあやめ草
あやめも知らぬ恋もするかな

又とこなつにとつけて

よみ人しらず

ほととぎす鳴くや五月のあやめ草
あやめも知らぬ恋もするかな

後撰和歌集巻第五

秋歌上

惟喬のみこの家にて

[illegible]

あまのかはせにたちてまつ

しらくも

天川こよひのあふせまつほどは

七月七日ふる雨をうらめしと

おもはれけるこそ

源中正

白雲のへだてぬ秋のあまのかは

よもふけじとや

水のうへにあやをたてたるあまのかは

なみのおりもの世のつねならず

前東宮

七夕をあやぎ(セイ)むるこよひこそ

かはらぬ君の契なるらめ

よみ人しらず

玉章の物ふみよりも秋風の

なびく人のこころをぞ見る

とこやそ

こひそめてふたれも七夕つまとかくあるも

梅雨川音添る夫のうハ
夫迄こひしき物ふそ添るあり
七夕の年こゝろいさゝれそん
凡海四郎伯

秋風のおとさへ七夕あ
七月八日のあしふ
七夕のうちなる夫迄あ
おもふ
あさゆふそのうちあそん七夕ハ
おりふしを
おもふ
あさゆふそのうちあそん七夕ハ
おりふしを
おもふ

秋風のふせハうすふ海きハ
たいしゝ
きう雪の神変さそふ秋風ハ
ゆく雲雪の上さいふくハ秋
秋風の雲そうきて物るの
ひくしの多少山のまれや
豊章亭
秋風ハ小ふ
演人名
つゝるの思つる日そしのこゝ
つゝねふ
もんへしゝ

たいしら波
ほのぼのとあけやすき夏の夜の
ふすまのうちの風のすゞしさ
よみ人しらず

あしたゆふべ吹くる風をかこつとも
なほ
なりてゆくかな
歌しらず
夏のいとふねぐらのみとつらし
秋のもすゑの
小野のみ雪

後撰和歌集巻第六
秋歌中
延喜の御時、秋のうた
まうしける

秋ごとの
きのつねよ
秋ごとのあはれはかはる
ものなれど
なほ
宮木野の
もとあらの小萩
よみ人しらず

浦近く立ちわたるのりのあさ煙
ものしめ野の

又

右方に
大懐

白菊のうつろふ秋の八月は
いとどこそ
うき人しもぞ
いせ

梅のよの月も光ハうすれてく人のをのゝ
あさの風つめたふてうぐひすハ
八月十五夜
いつとても月ハ名所ぞつきそめてよめとつくしきる
月ハ秋ぞの光の秋のそらそらしくハをのゝ
紀淑望朝臣
それよこ秋やそら〳〵久方の月ハ
ひとつもゆき

夜ふかきをうわ〳〵月ハ
てらすらんこゝろそそめの梅のかをとゝ
秋ハ月の原やそら〳〵天河
梅ハ花ハこゝろみそれつきまつ
波立つ物とハ秋ハ夜ふけのなかく
ふるみね
小松ふきおろすこのかげのうれ
よえ人〳〵
小松ふきおろすこのかげのうれ
これてくのみこれ家の会のこと

後撰和歌集巻第七

秋歌下

題不知

[illegible]

秋ぬれどもあひ人しらぬ

[illegible]

寛平御時きさいの宮の歌合

[illegible]

秋風にあへずちりぬる

在原棟梁

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋風にあへずちる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

滝のそこにうつれるかげをみて

白玉のいともぬきかけたるやうにみゆる滝のしらいと

ところの名所にもよくかなひたりといひつべし

滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほきこえけれ

あしびきの滝のいと白玉ぬきかけて落つる涙や春の雨なる

わが恋はよむ人もなき唐衣ひもゆふ暮れになりぬべらなり

わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ

題不知

読人しらず

後撰和歌集巻第九

恋 一

後撰和歌集巻第十

恋二

ものいふことしもありてこそ

人とそこととひもあへめ

物のこともいふかいはでかは

わがいつものそうそねん人とこと

まこと年つかうまつるめるかひ

きのことを

源中正

人といひてしもこそ

思ひ覚ゆ

思ひ初めてのち

あふことのきろと公のよ海松ふ

ふふくめもをうつるめの許

まつうらしげる

わかくさといふもゝのはなのさきみだれ
くふともつきぬとしのはるかな

ときわくさといふもゝのはなのさきみだれ
たいしゅん

海人のそもつものゝ中にしほの花
四一

潮せ共ゑとらぬ秋の月哉
又

よろこもとしゆん

ゆふかほといふもゝのはなのさきみだれ
つゝともかゝてそのかほとゞめぬ

中院右京
植敬仲

大懶
敬仲

忍ぶ草といふもゝのはなのさきみだれ
つゝともかゝてそのかほとゞめぬ

のあふをあてくれしひとをまつ
との井ありかきつゝをそつゝしる

前京兆宗長

かつらぎの人のかをとるもゝのはな
わのもりて物りるかをとゞめぬ

いよといふもゝのはなのさきみだれ
前右衛志朝臣

雪の雲井ふ海さのくもゝ

恋歌二

女のもとにつかはしける　二條右大臣

君をのみ思ひ寝の夜の夢ばかり
現にだにも人の見えこむ

返し　在原元方

思ひ寝の夢と知りせば覚めざらむ
よもあけはてじ物をかは思ふ

題しらず　女

ながめつつ思ふ物から白露の
置きてはかなき秋の夜ぞ経る

返し　貫之

白露の置きてはかなき秋の夜を
ながめつつこそ明かしかねつれ

女のもとにつかはしける　源宗于朝臣

ながめつつ思ふ心のいかばかり
深きを人の知るべかるらむ

返し　女

ながめつつ思ふ心の深さをば
いかばかりとか人の知るべき

題しらず　女

あふことのなぎさにしよる波なれば
うらみてのみぞ立ちかへりける

返し

寄る波の返るなぎさのうらみても
かひなかるべき心地こそすれ

中将
源信明
本院侍従
平宣文

関もりて人こうとを
ゆるさぬ
あふさかのせきもる男は
心なし
ものうきねをやかこたまし
伊勢物語
我庵のいもとのあるすそ原
雪しきりふる
いつ我人ふと人暁のわかれ
雪業平朝臣
立ちきぬ浦うつて野辺のけさ
雪
このちふわうそ別荘をあるじ人やかてもる
平中物
立ちきぬとこうてわりなあを人
ゆうしてわりなあるつもりなる
に給れいはつりなる
あふ坂のあのわるぬわりなる
勢ふそ
そもそもふ仏をふこあるきのいと
功やあるふ思ひそかて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

長谷雄朝臣